

序文

松下昇氏と出会ったのは、たしか、バリケート医科大学の学生会館ホールで
行われた講演会(～自主講座)の聴衆のひとりとして、あなたがそのあと
講演会を幹旋した荻原月勝氏と一語に交わり、とり囲んだ座談会ぶりの場で
直接話したのが最初であつたようにおぼえている。

当時、新聞や雑誌にのっていた松下昇署名の表現文章のいくつかを
読んだ。そのなかで、《情況への発言(あるいは)遠い夢》の、実際に、1967年
10月8日、佐藤新米阻止羽田闘争で行動したもの(～以下)への、透徹した
解放感をおたせる文章は、その表現~~と~~あるというしかない。表現(概念)
との出会いとして、静かに広がる衝撃波として、僕の中に浸潤していた。

ある政治目標への天空の彼方かけこみ命消える行爲であることを、
必然の理路としたものが、さうして、表現(行爲)であると言ひ、撰らるる
として、いま、ここのバリケート空間は、(市民)社会の一端での紛争、抗争、
闘争として、命～生の様相をどうあらためていくものとなるか——さう僕も
質問し、とによりふらふらつけたまうに思う。

松下氏があなたにどう答えていたか、とにより何を話し、なされたかは
おたく覚えているまい。か、さうして、出会い、ある存在との出会い、黙示
的なたまにもあつた、と、確かな感受としてあつたといふものにあつたか
と。

存在としての出会い——それは、また、非(存)在にかまわらず、非在が
出現している、それと対等に存在してはじめて成立していることを感じとらせ
ていくもの~~であつた~~^{存かたか}。

語ることをとること、書くことをとることとのまいたのにある距離を
うめ、懸隔をつくちかち、拮抗する力と脱力をあつとるまじかたの統一
にいて仕様があらうとすは、呼吸への距離、いまを止め、後退させられ
ていくしかたのよりに、さして、さうすは、ある地裏に死ぬ、被食に死ぬに
いふことか、死ぬにいて、部分有的に死ぬさかたものからの、あなたへの
呼吸があつて、——「あ、このうちは死ぬにいて、ある部分死ぬにいてに
語っている」といふものであつた。

彼は、書のように語り、口にはよく、語るように書けるその語るところに、死を
非在を、たゞ、うたてかけるようにほりうがめ、やせとこし、打ち消し、……
移動していた。彼ではない、互にそのかへと。

息がつかれていた、呼吸の仕方が異なる、というようになった。

語る、というのでもないがもしもない。勿論、しゃべるのでもないまじく、発語の
発音といったものでもない。声のトーンは、どこかしかないある傾斜してゆく下
から、へと、抑制をみこしにいきながら（ほ）出さず、その場その場のターミ
ンテーション。こゝから、関係性の全周をめぐってある重心でとまり、
こゝというところに言葉がある、言葉があるように承るべきときとできず存死に
いるものかあった。

ふたりに対して対面し、対峙したのは数分ほどしかない。大体十人前後の
幅のあるあつりのことであつたが、そのかたは——発音は、そこにあつたといふ
何人一人の、誰かかに照準をあわせてはうごいてありながら、その人とあつて
互の意見、意向をもつもの、違ふもの、その場にいないもの、ゆれこみに
あつたと感じているものの一周、まわりめぐりながら、その人の語ることに
つなきて促し、といひみに答へ、討議し、全く関係のないものとする事例を
たしてあつていき、討議ターミンの核心をうごめこむ。今度はけいぎとびの
ふりとはなしていったとみれば、ふと、異なる言語の、歴史時間上の、異類のた
びあつたあつた表現の型を対置し、次のふたの途中で、あつたは各人間
と、各人そのあつたの心中と重心にとどめあつていた、言葉が、表現として

二度ほどふたりに食事をするにかたは、一度目は、その当時僕が迷いとどけ
いたふたりに類々あつたことであつた。彼のふたりに注文したのどまかつたが、もう
一回は、僕が注文したもののには全くみまをきエキが、付出し程度の前
菜を、そのかたその場を切りあげていくこととなり、ふたりに白けとまど
なかつた。ふたりにあつた。

勿論、彼は時にその直い身体をゆすり、ひびきたたいて笑いながら、準備しているものよる、あめ玉を玉にしゃぶり、遠く白眼をこいたよる、脳頭をぶかしたやに、くわいにくかのよりにみえていることもあった。

僕、松下昇の死後、どうしよう、彼が生きているものとして、いつかの日に、松下昇からの最後の郵便物をうけとっていた。何の不思議でもなく、しかし、その数日、数時間か、生と死か、見のふたのよりにつながらている、つながらないきつらに直化され呼吸している存在と非存在であると、何かわかる気が、何かから何かのあたりの直化する部分配分であるかのよる偶然を立証してくれているとかが、ついでないかと、しつかりしている。

残念なこと、僕は、その語りや形態を、まづ、不器用に記述して、その内容を、このとして、現前呈示させたことができない。ある場合、テープをまわすという発想は、僕のまわりには、何となく、ある時期、いつか、よりにいる、といふより、対峙して、筆記して、いふとは、いたが……。ここで、僕は、僕にとり、笑笑的に、松下昇は、このに、どうして、しか、いふ、として、よりによる近似しているものとして、松下昇の筆跡による手紙を、複製してみる。

《手紙はひとの根茎・糸・ワケの巣である。手紙の吸血鬼性、よって手紙に固有な吸血鬼性がある。肉食の人間の血を吸う。菜食主義者と肉食者のトウキョウは、ほとんどもとにこの城を持っている。》

(シルドラルズ/フェリックス・カトリ 《カフカ マイナー文学のために》)

固有な血は肉食から菜食のうちにも吸われ、水でうすめられるとも、新しい媒質への相転移して、宙吊りしていつてもかきしめない。トウキョウも持っている城が、《分節上の隣接した田舎家の寄せ集めであるとか明らか》であるが、くすぶるトウキョウが新たな仮装をいつてもいるだろうから、……